

金光図書館蔵角筆文献の再調査

— 角筆文献の再整理と目録や調査法に関する今後の課題 —

柚木 靖史・近藤 友子・石田 泰子

キーワード：角筆、金光図書館、角筆文献目録、角筆文献調査法

一 調査の目的

金光図書館は、岡山県浅口市金光町大谷にある宗教法人金光教が運営する図書館である。昭和十八年に創立され、金光教に関する出版物をはじめ、国文学、国史に関する本、宗教関係、児童書、戦前雑誌等のほか、貴重な古文獻も数多く所蔵していることで知られている。その古文獻の中には、必ず角筆文献も存すると確信して、一九九二年に、広島大学の大学院生や広島女学院大学の学生を引率し、角筆文献の発掘調査を行った。予想どおりの成果で、筆記具としての角筆も含め、一〇点以上の角筆文献が見つかった。その成果は、すぐに小林芳規博士に報告し、発見した角筆文献の書誌的事項は『角筆文献目録』（小林

芳規編）に掲載されている。⁽¹⁾

その調査後、金光図書館の角筆文献を詳しく調査することのないまま、約三十年を経て、再び金光図書館の角筆調査を実施することになった。調査を思い至った理由としては、筆記具としての角筆がたいへん貴重な資料であったと改めて思い至り、その資料を再度確認したかったことがあげられる。また、三十年前の調査では、角筆文献の発見を重視し、本文に書き入れられた角筆を丁寧に解読することをしなかったが、金光図書館での調査から三十年が経ち、筆者も、様々な角筆調査を重ねてきており、その経験を踏まえて、再度、角筆文献を調査することにしたことも理由の一つである。したがって、今回の調査では、全ての角筆文献を、各丁にわたり全て読むというを行った。その結果、角筆文字の例に関しては、今回の調査で新たに見出

した例は多い。また、角筆文献の書誌的事項も、修正するところもあった。なお、筆記具の角筆は、たいへん行き届いた保存がなされており、三十年前と同じ状態で再調査することができた。

今回の調査では、図書館と関わりの深い角筆例会メンバーの二人の協力を得て、図書館情報学の立場や、図書館司書の視点から角筆の在り方の検討を行った。三十年前とは違って、デジタル化が進み、角筆情報も、紙媒体で保管するのではなく、映像も含めデジタルデータとして保管することが可能な時代となった。今回、お二人の角筆例会のメンバーと共同で、その新しい視点からの考察を行うことも本稿の目的の一つであった。

二 角筆が挟まれていた文献

金光図書館蔵の角筆文献のうち特に重要な発見は、板本の中に挟み込まれた状態で竹製の角筆が見つかったことである。角筆は、序（5丁裏）と本文（1丁表）の間に挟み込まれていた。角筆が挟み込まれた左側の丁（5丁裏）は、序の最終部であり、空白の行が多い。その空白部分には、左から起筆し右に向かう五本の横線が、2センチほどの幅で平行に書き込まれている。その凹み線は、太く、深い彫で、挟み込まれた角筆で書き入れられたとみて矛盾はしない。角筆の形状は、線を書き込むため

に力が一方から筆先に加わって湾曲し、紙面に当てられたと思われる先端が墨で黒ずんでいる。その状況は、挟み込まれた角筆が、実際に使われたことを示している。状況からして、この角筆を使い、五本の横線を書き込んだと考えられる。

このように、角筆の線が書き込まれたところに、角筆が挟み込まれて見つかった例は珍しい。角筆が実際に使われていたことを証明できるという点で、当該の角筆文献は貴重である。なお、同じような太い線は、挟み込まれていた丁以外からは見つからない。また、角筆文字の例も、本書からは見つからない。

後に書誌的事項を示すが、本書は「古川隼人氏」の蔵書であることが知られる。古川隼人氏（1889年（明治22年）生。1974年（昭和49年）死去）は、金光教の専掌、部長等の要職を勤められた。なお、角筆の書の使用者が誰であるかは、不明である。古川家に代々、伝わった文献であれば、角筆の使用が古川家に関わる人物である可能性もあるが、古川隼人氏が、生存中に古書を購入したうちの一つである可能性もある。その場合は、角筆の使用者は不明である。本書「中庸」は、天保頃の板なので、江戸時代後期から、角筆の使用が見られなくなる明治末ぐらいまでに、使用されたと考えられる。

【角筆が挟み込まれた状態で見つかった角筆文献】

□保 中庸 新校正 後藤点(題簽より) 一冊(全冊揃い)

二〇二三年二月二十五日再調査

(表紙貼付ラベル1) 金光図書館 古川隼人蔵書 漢之部 一冊

ノ内一巻 第二四号 85 (表紙貼付ラベル2) 810・7・

2-2 ファイルに納められた状態 ファイルに「中庸(古川

隼人氏蔵)とあり」(ファイル貼付ラベル)「金光図書館 10

936946」

江戸時代天保年間(題簽が破損しているため「保」しか読めな

いが、装丁からして江戸時代後期であることは明らかなので

「天保」と判断する) 袋綴装 印なし 縦25・5 横1

7・5 糲 表紙色 茶 黒墨書き入れなし 不審紙あり

(内題) 中庸 朱熹章句

(版心記) 校正点

(角筆例)

序(5丁裏)に角筆の線が、左から右に横書きの五本の線あり。

他に線はあるが、文字はない。

三 金光図書館蔵の角筆文献の書誌的事項

こゝでは、二〇二一年から二〇二三年にかけて再調査した角

筆文献の書誌的事項を示す。これらの、角筆文献はいずれも一

九九二年の調査時に発見された文献ではあるが、その時にはできなかつた角筆解読作業を行い、書誌的事項についても、修正を加えたものである。

(1)「改正 孝経 山崎嘉点」(題簽より) 一冊

江戸時代嘉永四年(一八五二)板 袋綴装 全巻揃い 「金光図

書館蔵」朱印あり 縦24・5 糲 横17・5 糲 表紙色 茶

題簽あり 墨書書入れなし 匡郭・単 不審紙なし

(刊記) 嘉永四辛亥年青陽

(角筆例)

孰マシカカ(7丁表4行目)

(2) 小学日本文典 田中義廉著 二冊

明治七年(一八七四)板 袋綴装 全巻揃い 「猫窠書屋」「金

光図書館蔵」朱印あり 縦25・5 糲 横17・5 糲 表紙色

黄 題簽あり 墨書書入れあり 匡郭・複 不審紙あり

(表紙見返し・印刷) 田中義廉著/小学日本文典 一二/明治七

年一月猫窠書屋

(刊記) 猫窠書屋蔵版/日本文典外編 日本大文典 翻刻

東京書林 雁金屋清吉/同出店 発兌

(角筆例)

(一冊目 卷二 二十二丁表上欄外)「篤」(逆さの文字)

《考察》

角筆例は、文字を逆さまに書いているという点で、特徴的な例である。逆さまに書かれた状況は、様々考えられるが、一例としては、勉強の場で、前に座って勉強している者が、後ろの席を振り返って、そのテキストに文字を書き込んだという状況である。いずれにしても、本を上下逆方向にして、文字を書き入れたということになる。ただ、なぜ、「第」という字が書き入れられたかということについては、明らかではない。

(3) 書名 文政□□ 孟子 道春点 二(題簽より) 一冊

江戸時代文政年間板 袋綴装 欠本あり 「金光図書館蔵」朱印あり 縦25・5糎 横18・0糎 表紙色 青 題簽あり 墨書書入れあり 匡郭・単 不審紙あり

(第一冊 一丁表・墨書) 盈 箱印

(第二冊 一丁表上欄外・墨書) 多嘉/李兵衛/千代丸/千代治

(第一冊 六十八丁・墨書) 忠満 目崎多嘉之

(第一冊 卷末墨書) 備後也 備中小田那 西原 備中小田郡笠

岡 遍照寺弟子常明從

(第一冊 後表紙・墨書) 大札屋 若松本

(角筆例)

(二冊目 42丁表8行目) 卿ヨリ

《考察》

「卿」の音は、「キヤウ」という開音であるが、ここでは「キヨウ」となっており、開合が乱れている。

(4) 朱熹集註 孟子 四冊

江戸時代後期板 訓点付刻あり 袋綴装 紺表紙 黒・朱書き入れあり 不審紙あり 縦27・2糎 横19・0糎 匡郭・複 朱印あり

(第二冊・後表紙見返し 墨書) 文久元辛酉七月 備前 森氏/

文政十二丑年二月上旬/紙数 九五枚 文政十三

(第四冊 墨書) 文政十二丑年二月上旬/此主稲垣氏 (「稲垣」

墨にて抹消)

(刊記) 荒川四郎左衛門梓行

【角筆例】

1 養^{【ヨウ】}・氣 (第一冊 序5才2)

2 流^{【リウ】}・行スル (第二冊 卷三 5才3)

3 養^{【ヨウ】}・煇 (『ヨウ』『サン』の墨書あり) (第二冊 卷五 14

丁才2)

4 陶^{【コウ】} (第二冊 卷五 18丁才2)

5 賤^{【セン】}・文^{【上】}・夫 (第二冊 卷四 16丁裏5行目)

6 井^{【セイ】}・地 (第二冊 卷五 10丁表3行目)

- 7 慕^{シトフ印字} (『シト』の墨書あり 角筆を先に書入れ、後から墨書を書き入れる。) (第三冊 巻七 8丁表3行目)
- 8 化^{クハス印字} (第三冊 巻七 26丁表6行目)

《考察》

1で「養」に角筆で「ヨウ」とあるのは、古い表記は「ヤウ」なので、開合が乱れている。2で「行」に「コ」とあるのは、「コウ」を「コ」とした、長音の短呼の例の可能性がある。「行」の古い表記は「カウ」なので、開合が乱れている。ここでは、「カウ」が「コウ」になり、さらに短呼して「コ」になった可能性もある。ただし、「コウ」の「コ」のみを表記した可能性もある。

3で「饗」に「ヨウ」とあるのは、古い表記も「ヨウ」なので、開合が一致する。4で「陶」に「ヨウ」とあるのも、古い表記は「ヨウ」なので、開合が一致する。

5の例は、「丈」の音を「上」という類音字で示している。

6の例は、「井」の音を示すにあたり、まず「イ」とだけ朱書で記していたが、後から角筆で「セ」を補い「セイ」と読ませている。角筆が、朱書の情報を補うために使われた例である。

7の例は、「慕」の訓「シタフ」を「シト(フ)」と読んでおり、ア段とオ段の交替例である。また、開合の乱れの例でもある。8の例は、「化」の音として「クハ」と合拗音が記されており、「カ」と直音化していない。

(5) 孟子 道春点(題簽による) 三冊

江戸時代安永二年(一七七三) 板 袋綴装 第一冊目を欠く
印なし 縦26・6糎 横18・0糎 表紙色 青 題簽あり
(かなり破損) 黒墨・朱墨・白墨書き入れあり 匡郭・単
不審紙 あり

(三冊目 後表紙見返の紙が剥がれた部分・墨書) 加藤賢仲子
左仲 本主

文政十四年 卯九月三日 加藤氏

(三冊目 後表紙見返・墨書) 加藤氏用

(刊記) 安永二癸巳歲秋九月吉

撰陽書肆 吉文字屋市兵衛／敦賀屋九兵衛
／泉屋卯兵衛／秋田屋市兵衛／柏原屋與左
衛門／堺屋清兵衛／柏原屋清右衛門／河内
屋茂八

1冊目 3・4・5・6巻 2冊目 7・8・9・10巻 3

冊目 11・12・13・14巻

(補足) 一九九二年に調べたときのラベルには③孟子 道春点
全一冊 92・7・25とあるが、二〇二一年十二月四日の調べ
で、「全三冊」に訂正した。

【角筆書き入れ】

(二冊目 巻九 34丁表7行目 上欄外) 「すでに」「あめ」

(本文に『既為天子』とあり、「すでに」は『既』、「あめ」は

『天』の訓と思われる。

(6) 箋注蒙求 三冊 (上中下)

江戸時代明和(一七六七)年板 袋綴装 題簽あり 表紙

白 黒墨・朱墨書き入れあり 不審紙あり 縦25・8糎 横

17・8糎 巨郭・単 朱印あり

(内題) 標題徐状元補注蒙求

(刊記) 明和四丁亥歳六月之吉

平安書肆／出雲寺和泉掾／風月庄左衛門／今井七郎兵衛

／梅村三郎兵衛／中村次郎兵衛／梅村藤三郎

／並河善六／榎井藤兵衛／河南四郎右衛門

【角筆例】

1 趙温雄飛 「ユ」(『雄』の右傍) (第一冊 卷上 45オ3)

2 靈輒扶輪 「チヨウ」(第一冊 卷上 51ウ3)

《考察》

1で「雄」に「ユ」とあるのは、「ユウ」を短呼したことを表す可能性がある。ただし、「ユウ」を「ユ」とだけ表記した可能性もある。2で「輒」に「チヨウ」とあるのは、「輒」の音の古い表記は「テフ」で、それが江戸時代には「チヨウ」となっていると考えられるので、開合においては一致している。

(7) 羅山訓点 易経 礼記 書経 詩経 春秋 十一冊

1992・6・25 羅山訓点 礼記 1・2・3・4

江戸時代後期板 袋綴装 全巻揃い 題簽あり 朱墨書き入れ

あり 縦25・8糎 横19・2糎 表紙 青

(表紙見返し・書入れ 詩経上) 光現寺什物 備前佐伯庄 光現

備前

(表紙見返し・詩経下) 備前佐伯庄 正慶山 光現寺

1冊目 易経 乾 2冊目 易経 坤 3冊目 書経 天 4

冊目 書経 地 5冊目 詩経 上 6冊目 詩経 下 7冊

目 礼記 一 8冊目 礼記 二 9冊目 礼記 三 10冊

目 礼記 四 11冊目 春秋

【角筆例】

1 (第六冊 詩経 下 17丁表4行目) 項(「コウ) 領、角

筆の他に墨書でコウとある。

2 (第七冊 礼記一 29丁裏3行目) 下―瘍(「シヤウ)

3 (第五冊 詩経 上 55丁裏3行目) 游―環(「クハン)

朱書で「ーン」とある。

4 (第六冊 詩経 下 12丁表3行目) 鰓(クハン(墨書)

寡(「カ)

5 (第五冊 詩経 上 47丁表4行目) 魴鱖(「シヤ)

6 (第五冊 詩経 上 55丁裏3行目) 脇駆(「キヨ)ク)

7 (第三冊 書経 天 32丁裏7行目) 播告(「ホト)コシヲ

ケルコト)

8 (第五冊 詩経 上 24丁表4行目) 遑恤(イトマアキ
「ウ」レエンヤ)

9 (第六冊 詩経 下 11丁表3行目) 阜(「サ」カンナリ)

【考察】

開合については、用例1のように、「項」の音を本来の「カウ」ではなく、合音の「コウ」と記した例が存する。墨書でも、「項」に「コウ」と記している。ただし、用例2では、「瘍」に「シヤウ」とあるが、これは本来「シヤウ」なので、開合が合っている。これらのことから、本書では、開合が乱れているため、本来の音と合ったり合わなかったりという事態が生じていると考えられる。このような混乱が生じているのは、開音が全て合音に成り切っていない状況を示しているのではないかと考えられる。

合拗音については、用例3のように、「環」の古い音表記である合拗音の「クワン」を、角筆でも保っている。ただし、用例4の「寡」の音は合拗音の「クワ」であり、これが角筆では直音の「カ」と記されていることから、合拗音の直音化の例もみられる。これらのことから、本書において、合拗音は保たれているとは言えず、一部に混乱が生じていたと考えられる。また、「鰥寡」の「鰥」に墨書では「クハン」と記しており、「寡」には角筆で「カ」と記している。このように墨書では合拗音を

保っており、角筆では合拗音を直音にしている。このことから、ここでは、変化を反映しやすい角筆の特徴を見ることができ、音韻の交替例としては、用例5のようにオ段音をア段音にしている例がある。この例は、鰥の音の「シヨ」を角筆では「シヤ」としてある。用例6は、「脇」の音「キヨウ」を「キヨ」としており、オ段拗長音を短呼した例である可能性がある。

本書における角筆の特徴は、用例7、8、9のように、印刷や墨による訓の足りない部分を角筆で補っている点である。恐らく、角筆の使用者は、本文を読み進めながら、印刷で表記されていない部分を角筆で補っていったのであろう。本書には、印刷の他に黒墨や朱墨によって、本文の読みが記されている。墨で補わず、角筆で読みを補っていたのは、本文に別の書写者の墨書を更に加えることによる混乱を避けたと考えられる。また、本人だけが、備忘として、書き留めておけば良いという状況でもあったのであろう。

(8) 古文真宝後集 全 一冊 (題簽なく外題は直書)

江戸時代元禄三年(一六九〇) 板 袋綴装 表紙 青 黒墨朱
墨書入れあり 匡郭・複 縦26・5厘 横18・6厘 不審
紙あり 全冊揃い

(内題) 魁本大字諸儒箋解古文真宝卷之一 後集

(表紙・墨書) 波多俊雄

(後表紙見返し・墨書) 明治十四歳九月上旬 紀元二千五百四拾
一捻 禁借貸

(刊記) 元禄三庚午年五月吉日 / 洛陽銅駝坊板行

(角筆例)

- 1 (巻上 1丁オ6) 后工カフ
- 2 (巻上 9丁オ2) 横檻カフ
- 3 (巻上 9丁オ3) 絃一嘔カフ
- 4 (巻上 10丁オ3) 皎一潔ニシテカフ
- 5 (巻上 14丁ウ6) 危巢カフ
- 6 (巻上 5丁オ6) 關一茸カフ
- 7 (巻上 10丁オ7) 上欄外「シフジフ」(ジフは踊り字)
蕭條トシテ
- 8 (巻上 7丁オ8) 一閣カフ
- 9 (巻上 9丁オ5) 函谷カフ
- 10 (巻上 9丁ウ7) 蕭颯カフ
- 11 (巻上 7丁オ5) 上欄外「ゴツ」蜀一山一兀
- 12 (巻上 21丁オ5) 上欄外「ぬれイ」奴隸

《考察》

開合に関しては、用例1のように、「后」(巻上)に「カフ」とあり、古い音表記「カウ」に対して「カフ」なので開合が合っている。なお、長音表記に関しては、本書では「フ」で表記する場合と「ウ」で表記する場合があるが、その標記の違い

については不明である。用例2は、「横」の古い音表記「ワウ」に対して、角筆は「ヲフ」になっているので開合が乱れている。用例3では、「嘔」に対して角筆で「ヲウ」とあり、古い音表記が「オウ」なので、開合が合っている。用例4では、「皎」に対して「コフ」とあるが、古い音表記は「カウ」なので、開合が異なる。このように、本書では、開合が合っている例と異なっている例がある。これは、開合が乱れている結果、このような混乱が生じているのではないかと考えられる。

用例5では、「巢」に対して「シウ」とある。これは、前接母音の影響で、オ段音「ソ」がイ段音「シ」に変化した可能性を示す。

四つ仮名に関しては、用例6のように、「茸」に対して「ジフ」とあり、「ジ」を「ジ」と表記しているので四つ仮名が合っている。なお、「茸」の音は「ジフ」ではなく「ジヨウ」である。用例7は、「條」に対して「ジフ」とあるが、古い音表記は「デウ」である。江戸時代の音は「ヂヨウ」となっていたと考えられるが、「ヂ」と「ジ」で四つ仮名が乱れている。

合拗音に関しては、8で「閣」に「カク」、9で「函」に「カク」とある。それぞれ古い音表記は「カク」「カン」なので、合拗音の直音化の例とはならない。合拗音の漢字に、角筆で読みを付した例は見いだせなかったので、本書において合拗音が保たれていたかどうかについては不明である。

用例6で「茸」に角筆で「ジフ」とあるのは、オ段拗長音をウ段拗長音にした例である。「茸」の古い音表記は「シヨウ」である。それが連濁で「ジヨウ」となっているのであるが、角筆ではこれを「ジフ」としている。「ジフ」は、江戸時代、「ジユウ」の音であったと考えられる。「フ」は「ウ」に代わる表記である。本書において、ウ段長音は「ウ」「フ」どちらの表記もあり、「ウ」と「フ」とで、長音の発音の違いは認められない。ここでは、「ジヨウ」が古い音表記であるところを「ジフ」としている。オ段拗長音をウ段拗長音にした例であると考えられる。

また、7・10の「蕭」の例も、オ段拗長音をウ段拗長音にした例であると考えられる。この例では、「蕭」を「シフ」としている。この「シフ」も前例と同じく「シユウ」となっていたと考えられる。「蕭」の古い音表記は「シヨウ」なので、「シフ」とあるのは、「シヨウ」というオ段拗長音をウ段拗長音にしたことをうかがわせる例である。

表記においても、墨書においては、平仮名と片仮名を交ぜて書くことは一般的ではないが、金光図書館の角筆においても、用例11や用例12のように平仮名と片仮名を交ぜた例が見られる。

(9) 新刻改正 大学 中庸 孟子 再刻後藤点 六冊

江戸時代安政五(一八五九)年板 袋綴装 縦25・0 糎 横

17・8 糎 朱印「川手蔵書」「大谷村川手氏」「金光教義講究所蔵」あり 表紙 赤 題簽あり 墨書書入れなし 匡郭・単 不審紙あり

(大学 表紙見返・刻) 林家正本再刻／芝山後藤先生定本／改正四書集註

(内題) 孟子 朱熹集註

(表紙見返・書入れ・孟子 二冊目) 川手與治郎 孟子

(刊記) 寛政四年壬子初夏御免上梓／寛政六年甲寅孟春発兌／文

政三年庚辰春再刻／天保六年乙未春三刻／天保十一年庚

子春四刻／嘉永三年庚戌春五刻／安政五年戊午春正月六

刻／平安書肆 五條通高倉東入町 北村四郎兵衛／日本

橋通壹丁目 須原屋茂兵衛／東都書肆 須原屋源助／浪

華書肆 炭屋五郎兵衛

1冊目 大学 全 2冊目 中庸 全 3冊目 孟子 一 4

冊目 孟子 二 5冊目 孟子 三 6冊目 孟子 四

(角筆用例)

(孟子一 8丁表2行目 上欄外)「る」(対応箇所不明)

(10) 礼記 十冊(題簽による)

江戸時代宝暦九年(一七五九)板 袋綴装 全冊揃 朱印「金

光図書館蔵」あり 縦25・6 糎 横17・8 糎 表紙色 白

題簽あり 黒墨・朱墨書き入れあり 匡郭・単 不審紙あり

白色の映入り

〔刊記〕宝暦九年己卯夏五月／皇都書林 丸屋市兵衛 今村八兵衛 風月荘左衛門 梓行

1冊目 (巻一・二) 2冊目 (巻三・四) 3冊目 (巻五・

六) 4冊目 (巻七・八) 5冊目 (巻九・十) 6冊目 (巻

十一・十二) 7冊目 (巻十三・十四) 8冊目 (巻十五・十

六) 9冊目 (巻十七・十八) 10冊目 (巻十九・二十)

〔角筆例〕

〔第一冊 巻二 17ウ上欄〕「私ニ」(対応箇所不明)

〔11〕新校訂 古文真宝後集 乾坤 二冊

江戸時代元禄十(二六九七)年板 袋綴装 題簽あり 黒墨書

き入れあり 表紙 薄茶 不審紙あり 縦25・5糎 横1

9・1糎 版心記「新校訂 改点正字」

ラベル「明治購入 402号 2冊之内1(第一冊目)」〔金

光教教義講究所蔵〕

〔尾題〕魁本大字諸儒箋解古文真宝後集巻之十終

〔第一冊遊紙〕赤田氏(黒墨書)

〔表紙裏印刷〕古文真宝文苑懿範。本邦量刻。何帝十数。予嘗就
輯。閱之。其間漏句者有焉。誤字者有焉。凡得觀者。往往增慨。

故今累数本考正之。一字無差。注釈字音貴如草本。／新校定改

訓点 古文後集／因不自料。採取先達之訓点。問亦如鄙意安收

点之以。欲儒児輩之誦読。武庫之君子希是正之。／元禄乙亥曉

春日／筑州後学貝原好古書

〔刊記〕元禄丁丑仲夏穀旦 堀河通 八尾平兵衛重刊

《考察》

開合に関しては、用例1で「荒」に「コウ」とあるのは、開
合が乱れている。本来は、開音である。また、合拗音の「クワ
ウ」である。ただし、用例2で「衡」に「カラ」とあるのは、
本来の音である開音の「カウ」を反映していると考えられる。

このように、本書では、開合が乱れている。ただし、すべてが
合音になっていないことは注目され、変化の途上であったこと
が伺われる。

1 (乾 上巻35丁表2行目) 荒唐^{「コウ」}

2 (坤 下巻45丁表5行目) 折^{「カラ」} | 衡^{「カウ」} カウ

〔12〕改正音訓 五経(易经 詩経 書経 礼記) 再刻後藤点
十冊

江戸時代文政十三年(一八三〇)板 袋綴装 表紙 茶 黒・

朱・白書書き入れあり 不審紙あり 縦26・0糎 横18・

5糎 匡郭・単 朱印あり(「上田山」第一冊易经) ラベル

「白神文庫」

(易经・坤 表紙見返し・書入れ) 西 上田氏

(易经・坤 後表紙見返し・書入れ) 上田氏 西上田氏 田井村

(礼記・貞 表紙墨書) 上田氏 西上田直道 田井村 上田氏

西上田姓

(礼記・貞 表紙見返し墨書) 上田姓直二郎

(礼記・貞 刊記) 天明四年甲辰九月朔日御免上梓/天明七年丁

未正月元日発兌/文化十年発

酉正月吉旦再刻/文政十三年庚寅正月吉旦三

刻/平安書肆 五條橋通高倉東人町/北村四

郎兵衛/浪華書肆 上町南革屋町/山内五郎

兵衛

1冊目 易経 乾 2冊目 易経 坤 3冊目 書経 天 4

冊目 書経 地 5冊目 詩経 上 6冊目 詩経 下 7冊

目 礼記 元 8冊目 礼記 亨 9冊目 礼記 利 10冊

目 貞

(注) 版が異なる「詩経 上」が一冊、混入している。したがって、東は十一冊だが、同一資料としては十冊とする。

【考察】

用例1は、「茅」に「ホヲ」とあるが、本来「バウ」なので、ここでは開合の乱れが認められる。

1茅 (「ホヲ」(角)) (易経 乾 4丁裏6行目)

(13) 虚堂録 八冊(巻五欠)

江戸時代宝永五年(一七〇八)板 袋綴装 表紙 青 不審紙あり 縦28・0糎 横19・5糎 匡郭・単

(表紙見返し) 頭書校正 虚堂和尚語録

(刊記) 宝永五年/戊子初冬吉日/書林

1冊目 巻一 2冊目 巻二・三 3冊目 巻四 4冊目 巻

六 5冊目 巻七 6冊目 巻八 7冊目 巻九 8冊目 巻

十

【角筆例】

(第七冊 巻八 5丁表3行目)「ホン」「イコ」(対応箇所不明)

(14) 小学句読 内篇 四冊(巻一・二・三・四・五)

江戸時代元禄七年(一六九四)板 袋綴装 朱印あり 表紙

青 縦26・2糎 横18・2糎 墨書朱書書き入れあり 匡

郭 複 不審紙あり

(第一冊目 表紙見返し・版)元禄七年龍集甲戌孟陽穀日/皇都

書林 川勝氏蔵版

(第一冊目 表紙見返し・墨書)松ノ尾金軌 丑ノ三月十五日ヨ

リ読初

(第一冊目 後表紙見返し・墨書)此巻丑五月朔日ヨミヲワル

西久寺

(第二冊目 表紙見返し・墨書)西久之 西丘之

(第二冊目 後表紙見返し・墨書) 西圭右衛門 義政代

(第四冊目 卷末・墨書) 岡田氏

(第四冊目 後表紙見返し・墨書) 佐見 御番書 西全衛門 義

政代

(第四冊目 刊記) 元禄癸酉六年八月吉日／京都 松友堂／江府

西村理右衛門

(角筆例)

(第二冊 卷三 4丁裏2行目) 惰^{「ダマン」}・慢

他に、点線で書いた文字(第二冊卷三9丁表 上欄外)「キ

ユ」や(第二冊卷三10丁表上欄外)「八合」という点線で書

いた文字や樹の絵を書いた例あり。

(15) 孟子集註 朱熹集註 四冊

江戸時代文政八(一八二五)年板 袋綴装 朱印あり 縦2

5・2糶 横18・0糶 表紙 薄青 黒墨朱墨書き入れあり

匡郭 単 不審紙あり

1冊目 卷一 2冊目 卷二・三 3冊目 卷四・五 4冊目

卷六・七

(表紙見返し・墨書) 清末

(刊記) 文政八年乙酉晚秋／発行書林／秋田屋太右衛門／須原屋

茂兵衛／須原屋平左衛門／須原屋伊八／須原屋源助

(角筆例)

(第二冊 卷二 21丁表 上欄外)「得」(本文中に「得」字あり。文字の練習か)

(16) 論語集註 朱熹集註 三冊(卷三・四)

江戸時代文政八年(一八二五)年板(15 孟子集註と装丁が同

じ) 袋綴装 印なし 縦25・5糶 横17・8糶 表紙 薄

青 題簽あり 黒墨朱墨書き入れあり 匡郭 単 不審紙なし

1冊目 卷一・二 2冊目 卷六・七 3冊目 卷八・九・十

(角筆の例)

(第二冊 卷六 16丁裏7行目)「ガク」(本文にある「嶽」に

対応か)

四 角筆文献の目録について

角筆文献は角筆で記入された文献であるが、角筆の文字は紙を引つ掻くように凹みをつけたものであるために視覚によって認識することが難しい。そのため角筆文献の存在自体に気づかれていないことも多いと考えられ、それが要因として角筆文献についての記録もこれまであまり取られていないことは容易に推測できる。特にこれまでの角筆文献における目録とは主に角筆の研究者によって角筆が存在している文献名や角筆の形や線文字、文字の意味等についての記録が主であり、統一した記録

様式がみられない。今後角筆文献が広く研究に用いられるよう考えていくならば、記録として統一を持たせた目録が存在することで図書館などでもその所在を把握しやすくなるのではないかと考える。

四・一 目録とは

目録について考えてみたいが、ここでは図書館における目録を基本として考えていく。

今日の図書館では資料を探す際にコンピュータで検索することができ、オンライン目録のOPAC (Online Public Access Catalog) を用いる。OPACはオンライン上で検索することにより、当該図書館における所蔵の有無や所在場所などの情報がすぐにつかみやすい。この場合の情報とは書名や著者名など、資料の基本的な書誌情報ということになる。日本図書館目録(1987年版改訂3版)の目録の説明に「一図書館または図書館グループが所蔵する図書館資料の目録記入と、参照を、各種の標目(タイトル、著者、件名、分類記号)を検索手段として、一定の順序で配列したもの。」⁽³⁾とある。ここから目録ではタイトル、著者、件名、分類記号などの各種標目が検索手段として用いられていることがわかる。また個々の資料についての記録(書誌記述)を考えた場合、その内容は「具体的には他の資源や別の版と識別するのに十分なタイトル、著者名、版、出版に関

する事項、ページ数など数量、大きさの書誌的事項である。」⁽⁴⁾といえる。すなわち資料のタイトル、著者名、版、出版に関する事項、数量(ページ数など)、大きさ、のそれぞれについて記録をとっておくことは資料検索のために必要な基本項目といえる。

四・二 角筆の目録とは

では角筆文献の目録においては、どのような項目が必要であるだろうか。上記の図書館の目録から考えた場合、著者名、版、出版事項、数量、大きさについて記録が必要と考えられるが、角筆文献のタイトルとは角筆によって書かれたものが文献中に含まれている資料のタイトルとなり、著者名は当然に当該文献の著者になる。その他の出版事項や大きさなども文献の書誌的記録となるが、しかしこれらの書誌記録だけでは一般的な書物の目録との違いはなく、角筆が含まれている角筆文献であることがわからない。そのため角筆文献とわかるための項目が記録のなかに必要になるものと考ええる。

四・三 目録規則と角筆の記録

ここでは日本目録規則1987年版改訂版を参考として角筆文献について考えたい。日本目録規則では図書やその他の資料についてそれぞれ書誌記録の規則が設けられている。図書は最も基本的な資料であり、規則の「1.04記述すべき書誌的事項

とその記録順序」ではすべての資料に共通する書誌的事項とその記録順序について決められており、ここではタイトルと責任表示に関する事項をはじめとして、版や出版、形態、注記などさまざまな事項が決められていることがわかる。注記は資料に対して何らかの注記を記すための事項であるが「注記に関する事項」の「2.7.4.7 (七)」は「注・訓点・識語・書き入れ等に関する注記」であり、「エ」識語、書き入れ、補写、筆彩等について、説明する必要があるときは注記する」とあることから「朱墨の書き入れあり」などの例示があげられている。この例示を参考に考えた場合、古書のなかに角筆で書かれた文字が発見された場合は注記に「角筆の書き入れあり」と記すことができる。またできるならば「角筆の書き入れあり(漢字)」や「角筆の書き入れあり(ひらがな)」などのように、角筆で書かれたものが漢字もしくはひらがなであるなど、その記されたものについてももう少し詳しく記すことが望まれる。

注記に角筆の情報を詳しく記すことができるならば角筆文献の存在が目録検索により掴めるのではないかと考えられるが、実際的には注記の検索がOPACシステムにおいてどの程度まで可能であるかを検証していく必要があるだろう。注記に細かな情報を記録しても、アクセスポイントとして検索できる文言の統一が必要であると考えられる。角筆をオンライン上の目録システムで検索することについては、さらなる考察が必要だと考え

る。

五 角筆文献調査について

角筆文献は、主に紙で作成された資料から読み解く。しかし、角筆文献は特殊な文字、しるしであるため、紙面から墨字の情報を得る通常の方法では、必要な角筆文献情報を得ることはできない。ここでは、角筆文献を調査するにあたっての準備物や効果的な調査方法について述べる。

五・一 角筆文献調査のための準備物

・たとう紙

まず、角筆文献の多くは古典籍といった、出版後かなりの年数を経たものを調査する場合がほとんどである。それらは劣化が進んでいたり、紙面が風化しかかっていたり、破損していたりすることがある。そのような脆弱な資料を汚損破損から守るため、まず机上に清浄なたとう紙を敷いておく。

・留守番紙・筆記用具・記録用紙

次に調査する資料を選択する。選択した資料のあった場所には留守番紙を置いておく。留守番紙とは、取り出した資料を元の場所に戻すため、その資料があった場所に代わりに置いておく紙である。半紙を幅2cmくらいにカットしたものなどを使う。

筆記用具にはシャープペンシルやボールペンなどは用いず、鉛筆を使用し、記録用の調査用紙も準備しておく。

・デジタルカメラ、懐中電灯、メジャー、角筆スコープ

五・二 角筆文献の調査方法について

前節で示した準備物を揃えて調査環境を整えたのち、角筆文献調査に取り掛かる。

まず、調査対象の資料がどのようなものであるか、書名や装丁、版心記、大きさ等を記録しておく。言語で記録するだけでなく、資料そのものを撮影しておくのも一つの方法である。その時は、資料の大きさが見て取れるように、目盛りの鮮明なメジャーを並べて撮影する。撮影する箇所は、表紙、裏表紙、必要であれば見返しやその他の箇所も撮影する。ただし、撮影は所有者の許可をあらかじめ得ておく必要がある。

資料の中の角筆文献を探す作業は、丹念に1頁ずつ目視で調べる方法で行う。角筆文献とみられるものがあれば、その個所と形態を記録する。これら角筆文献も撮影して記録に残す方法もある。その場合は、くぼみからの陰影が明らかに写り込むように角度や採光を工夫する。

この光の利用方法は、角筆文献の調査にとってたいへん重要な事項である。無色の紙のくぼみである角筆文献を発見するためには光は無くしてはならないものである。角筆文献が鮮明に見

える光は、自然光であると言われている。そのため調査を行う部屋は、日当たりが良く、窓からの採光が得られる場所であることが望ましい。ただ自然光は時間によって変化するため、できれば冬の夕方のように太陽光が弱まる時間帯は避けるように計画する方がよい。自然光が得られない場合は、懐中電灯など人工の光の助けを借りて調査を行うことも可能である。懐中電灯は光が分散するLED型のもではなく光が直進する豆電球を使った旧式のものの方がくぼみを鮮明に見せる。

また、角筆スコープという角筆文献を発見するための機器もある。電球部分の角度を自由に変えながら資料に光を当てて、探索するものである。箱型のものに電球が設置されているため、調査者の両手が空き、記録が取りやすい。ただ、現存する角筆スコープは個数が少なく、調査者すべてが利用できていない。今後は十分な数量が作製され、調査の効率と正確さが向上することが望まれる。以上が角筆文献の調査における準備と調査方法である。

六 おわりに

この度、金光図書館の角筆文献について、再整理を行い、書式的事項や角筆文字情報によって得られた方言的特徴について論じた。一九九二年の調査では、角筆文献の発見を中心に行っ

たが、今回は悉皆的に角筆文字情報の調査をもとに考察した。金光図書館の角筆文献は、一つの家に伝わる資料ではなく、様々な場所に伝わってきた書物を集積したものであり、そこに書き入れられた角筆文字情報も、その特徴を考慮しなければならぬ。しかし、具体的な所有者名や文献の所在地が墨書きによって分かる資料も多く、これらはその所在地の近世方言の特徴を知るうえで有効である。これらの資料の角筆文字情報から考察した結果も、他の備前地方の寺社で見つけた角筆文献から考察した内容と一致する内容であった。

一九九二年の調査から三十年後の再調査であったが、大きく変化した点として二人の角筆例会メンバーと共に調査を行ったことがあげられる。これにより図書館情報学や図書館司書の視点から調査方法や目録について、新たな視点を得ることができた。

今回の調査は角筆研究の今後を見据えた新たな出発点となった点で有意義であった。

- (1) 小林芳規編『角筆文献目録』1992.5-1994.5合冊
 (2) 本稿の著者三名で月に一回、角筆研究について様々な視点で話し合うために開催しており、現在45回になる。
 (3) 『日本目録規則』1987年版改訂3版、日本図書館協会目録委員会編、日本図書館会、2006年「付録6 用語解説」p.42「目録」の項を参照。

- (4) 『情報資源組織法』第3版、志保田務・高鷲忠美編著、前川和子、家禰淳一共著、第一法規、2021年p.16。書誌記述の項を参照。
 (5) 『日本目録規則』1987年版改訂3版p.54「20通則」の説明において「：また。和古書、漢籍（ともに写本、手稿等は除く）に特有の規定については、その条項あるいは条内の関連する箇所に「(古)」と付し区別した。：」とある。(古)は和古書等の資料に関わるものである。

【謝辞】

この度の調査の回数は、計8回に及ぶ。その間、金光図書館館長の大矢嘉氏を始め、職員の皆様にご支援をいただいた。特に、次長の岡田清華氏には、調査文献の搬出や管理、調査の日程の調整など、細やかな支援をいただいた。ここに記して深謝申し上げる。また、本論文の内容についても、事前にお読みくださり、投稿許可を得ることができた。

快速に調査できる環境を整えてくださった皆様方に、心より御礼申し上げます。

(執筆担当) 第一、二、三、六章、柚木 第四章、近藤 第五章、

石田

Reinvestigation of the Kakuhitsu Manuscripts Collected in the Konko Library
—Future Challenges in the Reorganization of the Kakuhitsu Manuscripts
and the Catalog and Research Methods—

Yasushi YUNOKI, Tomoko KONDO and Yasuko ISHIDA

Abstract

Based on a reexamination of the Kakuhitsu manuscripts collected in the Konko Library, this paper reorganizes the bibliography entries of the Kakuhitsu manuscripts and discusses dialectical elements in the Bizen region during the late Edo period, as revealed by Kakuhitsu character information. The initial research was conducted by the lead author in 1992, and it's been 30 years since the first research.

Additionally, recommendations regarding the catalog of the Kakuhitsu manuscripts and research methods are provided from the perspectives of library and information science and library administration. While Kakuhitsu manuscript research has traditionally been approached from a Japanese linguistic standpoint, the paper argues that, in the future, changes in catalog content and research methods are necessary from the standpoint of preserving the Kakuhitsu manuscripts.